

◆『戦史秘話』第六話◆

「靖郷隊」を知っていますか

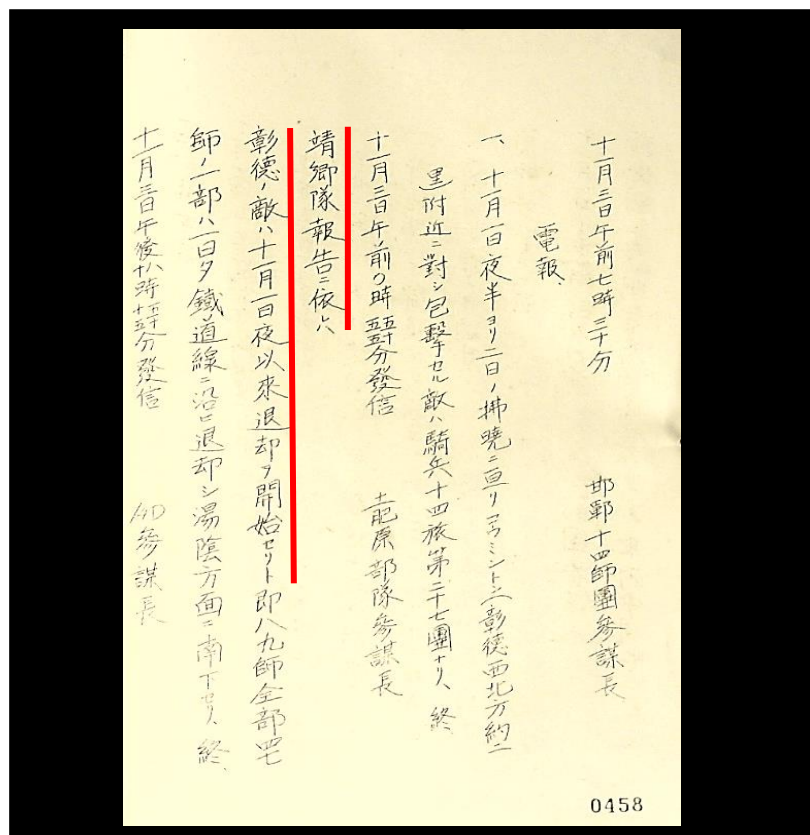
ー日本軍のなかの中国人・転向者ー

「靖郷隊報告ニ依レハ」

防衛研究所が所蔵している陸軍史料「第1軍機密作戦日誌 巻5」(支那ー支那事变北支ー50)に、1937(昭和12)年11月3日の第14師団参謀長(佐野忠義大佐。師団長は、土肥原賢二中将)の電報が収録されている。当時第1軍は、香月清司中将を司令官として、北支那方面軍に隷属、日中戦争勃発後、華北戦線で戦闘行動に従事していた。

電報には、「靖郷隊報告ニ依レハ 彰徳ノ敵ハ十一月一日夜以来退却ヲ開始セリト」(【史料①】参照)との一節がある。ここに記されている「靖郷隊」とは、どのような部隊であろうか。

【史料① 第1軍機密作戦日誌】



(アジア歴史資料センターにおいても閲覧可能。レファレンスコード:C11110962400)

一字違いの「清郷」という語は、当時「清郷工作」として広く使用されている。清郷工作とは、汪精衛政権が、1940 年末から 41 年かけて長江下流地域で実施した治安肅正工作を意味しており、「清郷」の語は、「四郷ヲ清查シ以テ盜匪賊ヲ肅清スル」との中国固有の治安工作に由来していると言われる(小林英夫・林道生『日中戦争試論－汪精衛政権と中国占領地』御茶の水書房、2005 年、165 頁)。当時、小口五郎『東亜研究講座第 103 輯 国民政府の清郷工作』(東亜研究会、1942 年)、山崎海弘『清郷工作』(愛之事業社、1942 年)、石濱知行『清郷地区』(中央公論社、1944 年)といった文献も刊行されている。

一方、華北では、「靖郷工作」という語を、防衛研究所所蔵の史料のなかに見出すことができる。例えば、「青年少年少女婦女救国宣撫隊組織指導要領」(支那－参考資料－23)には「地方靖郷建設工作ノ萬全ヲ期セントス」、「国民 30 年度華北政務委員会予算書其他提出の件(1)」(陸軍省－陸支密大日記－S16－12－35)には「昭和十六年度肅正靖郷工作費(特別工作費)予算書」の記述がみられる。

桜井徳太郎と靖郷隊

靖郷隊についてさらに調べていくと、陸軍軍人の桜井徳太郎という人物が浮かび上がる。桜井は、1897(明治 30)年 6 月 21 日福岡県生まれ、1918(大正 7)年陸軍士官学校(30 期)、1925 年陸軍大学校を卒業している。その後、北京陸大教官、第 10 師団参謀などを経て、盧溝橋事件当時は、中国の第 29 軍顧問(支那駐屯軍司令部付)であった。第 29 軍顧問として、日中の狭間で事変の拡大を回避するため奔走、広安門で負傷たことはよく知られている。事変拡大後は、1937(昭和 12)年 8 月中佐に昇進、9 月第 1 軍の参謀として、華北方面の作戦に従事していた。

桜井は、戦後出版した『世界不戦論』(誠和聯盟、1963 年)において、「九月六日第一軍参謀を命ぜられて第一線に立つと同時に二日間で靖郷隊を編成した。…隊員は日支人の混成で便衣の上端と下端に赤線を入れ、靖郷隊と墨書した腕章をつけさせ一号モゼルを携帯させた」と記している(263 頁)。ちなみに、隊員となった中国人は、中国軍から逃亡してきた兵隊を集め、説得のうえ帰順した者たちであった(桜井徳太郎『廣安門』刀江書院、1939 年、69 頁)。

靖郷隊は 4 隊から構成され、各師団に一隊が配属されていた。本部のほか、第 1 隊(隊長:堀内鉄洲)は第 6 師団、第 2 隊(隊長:内田武夫)は第 20 師団、第 3 隊(隊長:塚本)は第 14 師団に配属され、「情報収集、帰順工作、謀略、治安維持等に当るもので作戦軍を助けて縁の下での力持ちをする」役割を担っていた(桜井『世界不戦論』263 頁)。ちなみに、「靖郷」の由来は、「靖は鎮めるであり、『郷』は部落、都市である」とされている(岸田国士『北支物情』白水社、1938 年、101－102 頁)。

同隊は、永定河渡河作戦ののち、保定、正定、石家荘の攻略と転戦が続けたが、例え

ば、正定攻撃について、桜井は、「靖郷隊員をつれて城の西北角から城内に這入った。まだ敗残兵が居て沢山の傷病兵が残って居たのでこれを収容し、兵器を集めたり、治安維持会を作ったりした」と記している(桜井『世界不戦論』269-270頁)。

桜井が靖郷隊を創設した契機は、満州事変後の昭和6年12月混成第8旅団の参謀として奉天に派遣され、同地で満州国の靖安遊撃隊の訓練を支援した自身の体験にあった。桜井は、同遊撃隊について、「靖安遊撃隊と云うのは当時奉天附近の帰順部隊を集めて一千人から一千五百人を和田勲満州国軍少将司令官になって編成したものである。兵器は日本軍のものと鹵獲したものを使い、隊長以下兵と同じ食べ物を食べ、兵と起居をともにした。満洲は満洲人で守るのだという理念でやって居た」と記している(桜井『世界不戦論』240頁)。

靖安遊撃隊は、1932年1月20日奉天において、関東軍参謀の小松己三雄少佐指導の下、奉天省自治政府直轄部隊として編成された。和田勲(予備役中尉)が、満州国軍の少将として司令に就任し、日本人を中核としつつ日満混合の部隊で、袖に紅布を付けていたため、「紅袖隊」とも称されていた。国軍の結成にともない、1932年11月国軍に編入、靖安軍と命名され、司令には藤井重郎少将を迎えた(満洲国軍刊行委員会編『満洲国軍』蘭星会、1970年、28-29頁)。

ちなみに、日中戦争の勃発にともない、関東軍の要請に応じて、靖安軍を主体として熱河支隊(支隊長:藤井少将)が、1937年8月1日承德において結成され、藤井支隊長が戦死するなど苦戦を強いられたが、関東軍のチャハル作戦を支援した。

一方、靖郷隊の活躍は、当時広く伝えられていた。『中外日報』(1937年12月5日)は、「靖郷隊の盟主 桜井中佐」として紹介、さらに「北支戦線の花 靖郷隊に従うて」(三上諦聴執筆)のエッセイを掲載していた。そこでは、「日本人の十人位のリーダーと三十名位の支那人の寄り合ひ世帯、彼等は皆支那に永く遊んだ支那事情通、どれもこれも桜井参謀の義気に生命を賭して働く憂国の士浪人を以って自任する彼等」と記されていた。また、任務については、単なる宣撫工作ではなく、堪能な中国語を生かして、治安維持会を結成、日本軍のために苦力を集め活用し、さらに憲兵などと協力して日本軍を誘導するなど広範に活躍しており、まさに「愈よ機能を発揮し北支戦線の花と満開したわけだ」と称賛していた。

また、岸田国士『北支物情』(白水社、1938年)、西森久記『鬼神も哭くー熱血の慰問行』(新興亜会出版部、1941年)、長谷川春子『北支蒙疆戦線一画と文』(暁書房、1939年)などの出版物においても、その活躍が紹介されている。

転向者・曾木克彦の戦死

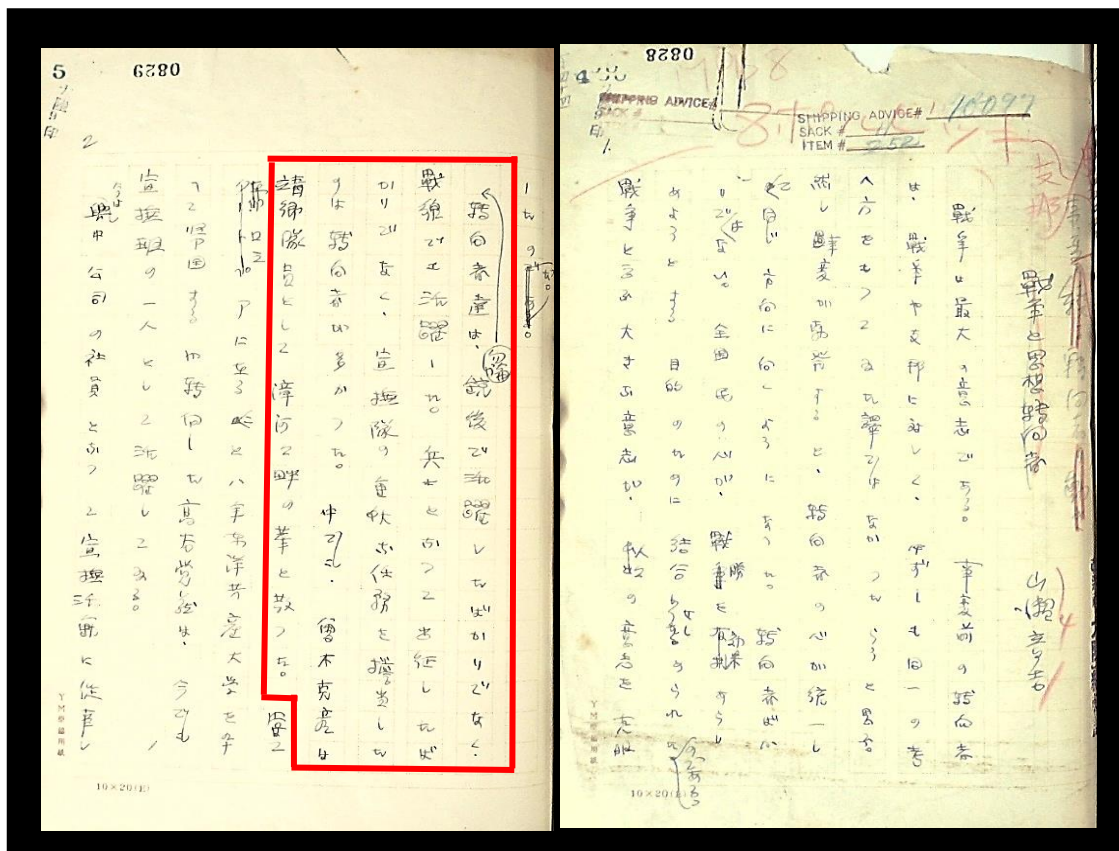
靖郷隊について記した防衛研究所の所蔵史料のなかに、「山瀬音吉『支那事変と転向者』原稿」(陸軍省一壺大日記-S16-7-224. 昭和16年。【史料②】参照)があり、本原稿は、「支那事変と転向者」と題して活字化され、『大陸』創刊号(1938年6月)に掲

載されたが、転向者の日中戦争に対する戦死を含む貢献について記したものであった。

そこには、「転向者達は、銃後で活躍したばかりではなく、戦線でも活躍した。兵士となって出征したばかりではなく、宣撫班の重大な任務を担当したのは転向者が多かった。中でも曾木克彦は靖郷隊員として漳河河畔の華と散った」との一節がある(74 頁)。

ここに記されている曾木克彦は、1900(明治 33)年 3 月 22 日東京で生まれ、1929(昭和 4)年 3 月東京帝国大学経済学部卒業、日本勧業証券会社入社したが、在学中から新人会の会員として社会運動に関心を有していた。

【史料②「支那事变と転向者」原稿】



(アジア歴史資料センターでも閲覧可能。レファレンスコード:C04014884600)

1929 年の 4・16 事件(共産党に対する一斉検挙)ののち、共産党は運動資金に窮したため、党中央委員長の田中清玄は、曾木を「金策係」として活動資金を収集させた。このとき、歴史家の羽仁五郎は 100 円、のちに転向、戦後『大東亜戦争肯定論』を執筆した林房雄らは 5 名で 120 円、『蟹工船』で有名な作家の小林多喜二は 50 円を出資している。そのため、1930 年 2 月、曾木は治安維持法違反で検挙された(司法省調査部編『司法研究』報告書第 28 輯 9「プロレタリア文化運動に就ての研究」1940 年 3 月、441-447 頁)。

その後、裁判で懲役 4 年の判決を受け、豊多摩刑務所に入所、刑務所内で転向、1935 年 4 月に仮釈放された。出所と同時に満州に渡り満洲国民政部、その後天津の特務機関、冀東政府情報部などで勤務した。

日中戦争の勃発と同時に、桜井中佐の下、軍属として靖郷隊長に任ぜられ、第一線で活躍する。保定から平漢線を南下、石家荘、正定、順徳を経て、河北省と河南省の境の漳河河畔で中国軍と激戦、1937年10月18日中国軍の猛撃を受け、壮烈な戦死を遂げた。

曾木の最期の状況について、桜井中佐は、以下のように記している(櫻井徳太郎「曾木克彦君を憶ふ」北島織衛編『曾木克彦追悼録』1938年、11頁)。

「予は曾木君の手を握りて『しっかりせよ』と叫びしに『天皇陛下万歳』と唱ふ、依て予は…将兵一同を集めて『天皇陛下万歳』を三唱す彼亦小さき声にて『万歳』と唱へ遂に十一時過永眠せり、誠に残念至極なり」

当時、曾木の戦死は、転向者であっただけに、大きく報道された。例えば、『東京朝日新聞』(1937年10月19日)は、「これが日本人だ！ 挺身・祖国に殉ず 往年の“赤”の闘士 曾木勝彦氏戦死す」と報じている。ほかにも、斎藤正躬「事変の裏に活躍する北支宣撫班・血涙の工作を見る」『話』(1938年2月号)、栗田堯一「時代の子・曾木克彦」『話』(1938年11月号)などでも取り上げられ、北島織衛編『曾木克彦追悼録』(1938年)も刊行され、桜井中佐は弔詞を寄せている。

1938年8月には、支那事変第三次論功行賞により、転向者として初めての叙勲である勲6等旭日章が授与された。さらに、1939年4月には靖国神社に合祀され、母親の曾木富士子は、「有難き聖恩に泣く…」(『婦人倶楽部』1939年7月号)と題した手記を寄せている。

一方、転向者で戦死したのは、曾木だけではなかった。司法省保護局が編纂した『讃功録』(司法保護協会、1941年)には、日中戦争に従軍した転向者の功績(戦死:22名、戦病死:9名、戦病傷:17名)が紹介されており、曾木も含まれている。同書の「序」では、以下のように記されている。

「本書に収録せる勇士達は嘗つて我国思想界の疾風怒濤の時代に之に捲込まれて苦難の道を辿りたることあるも、今次事変に際会し本然本来の日本精神に目覚め、勇躍して征野に赴き、大君の御楯となって赫赫たる武勲を建て、護国の英霊又は榮譽ある傷兵として仰がれるに至った人々である」

転向者としての曾木の戦死は、そのほかにも、全日本司法保護事業聯盟『司法保護叢書第2輯 報国美談 転向者の祖国愛』(全日本司法保護事業聯盟、1938年)、竹内浦次『臣道読本』(増進堂、1942年)などでも取り上げられていた。

当時、転向者の日中戦争にたいする貢献は、「中でも、第一に挙ぐべきは、彼等の大陸進出の逞しい姿であらう」として、出征や大陸での勤務における活躍振りは、脚光を浴びていた(山田清三郎「左翼転向者の進出せる職場」『読売新聞』1938年11月8日夕刊)。

中国側で戦った日本人は、鹿地亘の日本人民反戦同盟や岡野進(野坂参三)の日本人民解放連盟、青山和夫など、「日本兵士の反戦運動」としてよく知られているが(鹿地亘『日本兵士の反戦運動』同成社、1982年、菊池一隆『日本人反戦兵士と日中戦争ー

重慶国民政府地域の捕虜収容所と関連させて『お茶の水書房、2003 年などを参照）、同じ共産主義者でも、転向し日本軍として奮戦、戦死した者の存在はあまり知られていない。

このように、中国人や転向者を構成員とする靖郷隊の存在は、日中戦争は、従来の「抗日戦争史観」や蒋介石と共産党の「内戦」だけでは語れない、複雑な様相を呈していたことの一端を物語っているのである。日中戦争は、いまだ「知られざる戦争」である。

（研究幹事 庄司潤一郎）